

SPECIAL
特集

京都芸大新研究棟

高度研究の「発信基地」

FOCUS ON NEW BUILDING OF KCUA

京都市立芸術大学広報誌 2008年度 1月 | vol.011

芸大通信 .

特集

京都芸大 新研究棟 ————— 高度研究の「発信基地」

京都芸大の新研究棟は、本学創立 120 周年を記念して 2000 年 3 月に完成しました。これに合わせて大学院美術研究科博士（後期）課程と、日本伝統音楽研究センターがこの新研究棟に設立され、さらに 2003 年には大学院音楽研究科博士（後期）課程が設置されました。以降、この特殊かつ高度ながらもユニークな新研究棟は、学外に向けて様々な成果を発表し、注目されています。

美術



音楽



新研究棟
1 階～5 階

博士（後期）課程

Studios for
Ph.D. Program

新研究棟
6 階～8 階

日本伝統音楽
研究センター

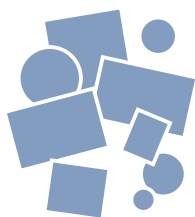
The Research Centre for
Japanese Traditional Music





日本伝統音楽研究センター

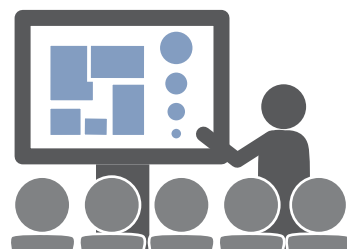
新研究棟の6階から8階には、日本伝統音楽研究センターがあります。当センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の側面から総合的に研究する国内唯一の公的研究機関です。新研究棟の完成と同時期の2000年に設立されました。



① 収集・保存する。



② 研究する。



③ 公開する。

どんなことをしているところ？

大きく分けて3つです。

1つ目は研究資料の収集および無形・有形文化財の**保存**です。伝統音楽・芸能に関わる文献や音響映像資料や楽器など、散逸しやすい資料を次世代に伝えることは、研究の土台をつくるための重要な作業です。

2つ目は**調査・研究**です。センター教員が地道に取り組む日本伝統音楽・芸能の**個別研究**や、外部の研究者・演奏家の協力を得て、学際的・国際的な視野で行う**プロジェクト研究・共同研究**などがあります。

3つ目は**公開・啓蒙**です。日本の伝統音楽の情報発信拠点として、収蔵資料や研究成果等の公開に努めています。

なぜ、伝統音楽？

古くから日本の地で、外からの要素の受容を繰り返し、独自の様相を今日に受け継いでいる日本の伝統的な音楽や芸能。日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。維持継承させるだけでなく、新しい文化を創造するための源泉として注目されています。

なぜ、京都で？

1200年以上にわたって日本の文化創造の核であり続ける京都は、国内外における認知度も高く、多くの大学や研究機関も集まっています。そうした利点を有効に活かし、日本伝統音楽の研究の核となることを目指しています。

私たちも参加できる？

はい。センターでは、伝統音楽・芸能の解説や実演とともに最新の研究成果をわかりやすい形で提供する**公開講座・セミナー**等を学内外で開催しています。**出版物の発行**や**インターネット**による情報や資料の発信にも積極的に取り組んでいます。



1 収集・保存する。

日本伝統音楽研究センター でんおんコレクション

※「でんおん」とは…日本伝統音楽研究センターの略称です。

収蔵点数がもっとも多いのは文献資料ですが、中にはユニークな逸品も収められています。それらを少しだけご紹介。なお、「展観ギャラリー」(P.6 参照)では、これらをはじめとした文献・楽器・パネル等を、特定の研究テーマに即して展示しています。



【紙腔琴 (しこうきん)】
小穴を開けた巻紙に空気を通し、古今東西の曲を自動演奏。明治 25 年に日本で発明。SPレコードの台頭によって衰滅。



【ハルモニウム】
片手で空気を送りながら、もう一方の手で演奏する鍵盤楽器。もとはヨーロッパのリードオルガン。インドにおいて改良され、伝統楽器としても定着。



【ハーモニカ・鳩笛】
前者は Dragon-fly (トンボ楽器製作所) の単音 10 穴型、後者の詳細は不明。どちらも楽器というより玩具だが、ハーモニカは笙から学んで開発され明治中期に逆輸入された経緯もあり、鳩笛とともに郷愁を誘う音具となったのかもしれない。



【三味線・三線】
三味線は 16 世紀後半、琉球の三線 (写真手前) を改良して、瞬く間に庶民の心を捉えた近世邦楽の中心楽器。用途に応じて微妙に異なるのが特色。



【サウン・ガウ】
いわゆるビルマの豎琴。現在は 16 弦が多いが、当楽器は 13 弦。インドから伝来したハーブ。室内楽で使用。



【鼓 (ちちん)】
奄美地方のくさび締め太鼓。皮をなめさずに用いるのが特徴。「八月踊」などに用いる。



【薩摩琵琶】
琵琶はアジアに広く伝播する。日本では物語を語り歌うのに必要不可欠な楽器。薩摩琵琶は、勇壮さを重んじる男性的種目だが、楽器の音色は濃厚、緻密。



【チャルメラ】
16 世紀頃に南蛮・中国より流入。長崎くちで今も大活躍。歌舞伎では、異国情緒を表現する特殊な用例も。



【オ (鼓)】
レプリカ。白虎の彩色が一般的。韓国では孔子廟・宗廟祭礼楽で使用。さらさらで虎の背のザガザガをこすって、曲の終了の合図とする。



【八雲琴】
19 世紀初めに中山琴主が創始した二弦琴で、竹を象った桐胴に張った絹糸を同音に調弦。主として神道系の儀礼で弾き歌いをする。



【外題板 (げだいたい)】
文楽上演時、舞台下手の大柱に掛けられた。上演のたびに職人の手によって書かれた勘亭流風の文字は、芝居の雰囲気を出した。国立文楽劇場開場とともに、その習慣もなくなった。※専任教員個人のコレクション



【祇園会細記 (ぎおんえさいき)】
宝暦 7 年 (1757) に京都で刊行された、祇園祭の初の本格的なガイドブック。全山鉦の形態や懸装、囃子の楽器などが、大変写実的な形で図解されている。



【箏曲の楽譜】
教養としても嗜まれていた箏曲の楽譜。楽箏の記譜法を応用した弦名譜が各種ある。左端は明治 44 年刊の五線譜。



2 研究する。

日本伝統音楽研究センター

専任教員の紹介

研究の対象

どんな研究をしているの？ 伝統音楽ってなに？

伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみすえる

明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承

古代

祭祀歌謡と芸能（楽器等の考古学的遺物を含む）

上代・中古

仏教音楽（声明等）

宮廷の儀礼

宴遊音楽（雅楽等）

中世

仏教芸能（琵琶、雑芸、尺八等）

武家社会の芸能（能・狂言等）

流行歌謡（今様、中世小歌等）

近世

外来音楽（切支丹音楽、琴楽、明清楽）

劇場音楽（義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等）

非劇場音楽（地歌・三味線音楽、琵琶楽、尺八等）

流行歌謡（小唄、端唄等）

近代社会での伝統音楽の展開をみすえる

伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究

伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究

広い視野で生活の音楽をみすえる

民間伝承と日本関連諸地域及び先住民族の音楽・芸能の研究
生活における音楽・芸能（わらべうた・民謡、祭礼音楽等の民俗芸能）の研究

プロジェクト研究 共同研究



週末の新研究棟はアツイ！

土日を中心に、全国から研究者や演奏者（延べ約60名）が集まるプロジェクト研究・共同研究は、センターの研究の核ともいえます。その内容は、研究発表、資料や情報の交換、そして、熱い議論。

2008年度のテーマ

- 歌と語りの言葉と「ふし」の研究
- ヤタイの祭りと囃子
- 地歌作品研究
- 音楽・芸能史における芸術化の諸問題
- 胡弓の源流と受容

研究会は非公開ですが、その成果は報告書・公開講座・ホームページ等で参照できます。関心のある方は、各専任教員にお問い合わせください。075-334-2240（教務学生課）



久保田 敏子 所長
音楽学・日本音楽史学



見聞だけでは不満足な好奇心を満たすためのお稽古フリークが昂じて、研究職を選びました。今でも、雅楽から声明、能楽、琵琶、尺八、箏、三味線音楽、鳴物、舞踊に至るまで興味津々です。目下は伝統音楽の保存と継承に焦点をあてて、古譜や唄本の研究をしています。

主要著書：『点描日本音楽の世界』
『よくわかる箏曲地歌の基礎知識』
その他、論文や各種曲目の解説など

後藤 静夫 教授
近世芸能史・文化史



人形浄瑠璃・文楽に密着して30年余。その間は無我夢中で走り続けて来ました。少し離れて見ると、実に奥深い世界であることに改めて気付かされます。三味線音楽だけでなく、声明や能・狂言、民俗芸能…勉強し直さなければならないことが山ほど。まずは地道に「伝承」の事などから調査・研究を進めています。

著書：『人形芝居と文楽』
共著：『文楽談義 語る・弾く・遣う』他

山田 智恵子 教授
音楽学・義太夫節



これまでは現在伝承されている義太夫節の音楽面を研究してきたので、今後は歴史的に遡りたいと思います。音楽的にみて現在に繋がり、歴史的にも扱うことができる幕末期・明治期の義太夫節について、歴史的音源や三味線譜本なども材料として研究を上げていきたいと思っています。

共著：『義太夫節の様式展開』
共編著：『文楽談義 語る・弾く・遣う』

田井 竜一 准教授
民族音楽学・日本音楽芸能論



山・鉾・屋台の祭りの囃子を中心として、日本の民俗芸能の調査研究をおこなっています。特に、センターのお膝元である、京都の祇園祭りの囃子については、毎年1ヶ所ずつ調査をすすめているところです。

共編著：植木行宣・田井竜一編『都市の祭礼—山・鉾・屋台と囃子—』（東京、岩田書院、2005年）その他、祭礼や民俗芸能の調査報告書等にも多数寄稿

竹内 有一 准教授
日本音楽史学



近世の人々に親まれた浄瑠璃や長唄などの三味線音楽、その周辺の芸能・文化を出発点に、過去から現在に受け継がれたモノ・カタチ・思想について、あるいはそれらの変容の諸相やシステムについて見つめ直しています。

編著：『詞章本の世界—近世のうた本・浄瑠璃本の出版事情—』
論文：「文化14年のピアノ奏曲—日蘭交流の舞台裏—」など

藤田 隆則 准教授
民族音楽学 (ethnomusicology)



民族音楽学者は、異文化の音楽を、研究する人種です。私もその端くれとして精進しているつもりですが、異文化とは何か、音楽とは何か、研究とは何か、だんだんと、わからなくなりつつあります。日本の伝統音楽研究をつづじて、学問の快楽を味わう。その道を、志ある方々と共に進むことができれば、と願っています。



3 公開する。

日本伝統音楽研究センター

市民向けイベント・情報発信

閲覧室

興味があるかたならどなたでも

研究者向けの施設ですが、日本伝統音楽を調べたい・学びたいという意志のある方ならどなたでも、文献を閲覧したり、リファレンス相談が受けられます。「市立図書館や他大学の文献では物足りない!」という上級者から、「日本伝統音楽はさっぱり…」という初心者までご利用いただけます。



展覧ギャラリー

7階廊下は知られざる知の宝庫

1年間に約6本の展示を企画。催事のない時は消灯しているので、ご覧になりたい時は、6階閲覧室にお声かけください。



関連出版物

おもな出版物

センターでは、プロジェクト・共同研究、個別研究等の成果を広く公開、紹介するために、各種の出版物を発行しています。

- 研究紀要『日本伝統音楽研究』
- 研究報告書『日本伝統音楽研究センター研究報告』
- 研究資料『日本伝統音楽資料集成』
- 広報誌『日本伝統音楽研究センター 所報』
- 『田邊尚雄・秀雄旧蔵 楽器コレクション図録』



これらの出版物は、全国の研究・教育機関、大学図書館等に無償で提供していますので、お近くの機関等を通じて閲覧いただけます。

お問い合わせ先：企画広報課 電話 075-334-2204

公開講座

当センターの誇る一大イベント

企画・運営はすべて本学スタッフが行いますが、演奏者・外部研究者など豪華ゲストの参加が目玉となります。1年に3〜4回実施しています。会場は企画内容に応じて学内・学外を転々とするので、事前にご確認ください。



伝音セミナー

音楽好きの市民の皆様へ

毎月、当センタースタッフが、受講者と一緒さまさまジャンルを傾聴する貴重なひととき。これまでにSPレコードを中心にセミナーを開催してきました。参加料は無料です。



でんおん連続講座

講師のキャラクターもさまざま

日本の伝統音楽・芸能をもっと知りたい、大学・大学院の講義で扱うような専門的なテーマや方法をちょっと触ってみたい、何気ない事柄を考え直してみたい…そんな熱心な方にお薦めです。



ホームページをご活用ください!

データベースや研究資料、研究報告など、研究成果の一部をオンラインで提供する「伝音アーカイブズ」をはじめ、出版物の購入申込書・購入申込書のダウンロードや、上記のセミナー・公開講座の最新情報もご覧頂けます。

<http://jupiter.kcuu.ac.jp/jtm/>





大学院 博士（後期）課程

新研究棟の1階から5階には、博士（後期）課程があります。開学以来、本学は京都をはじめ関西や西日本地区の芸術教育の中心的拠点として機能してきました。そして現在は、理論・実技系両方の博士（後期）課程を設置している、全国の芸術系大学の中でも数少ない大学として存在しています。また公立大学として課せられた役割として、本学の修了生のみならず他大学の修了生にも高度な研究の場を提供しています。

美術専攻

大学院美術研究科 博士（後期）課程とは

大学院博士（後期）課程は、修士課程を修了した専門的な技能を有する学生や社会人として活躍している専門的な技能者、海外からの留学生に対して、その技能にさらに磨きをかけるだけでなく、理論的側面でも研鑽を積み、京都というすぐれた文化的な地域を意識しつつ、グローバルな（全世界的な）芸術の動向に寄与する高度の専門家を育成することを目的としています。

この目的のために、14の専門的な研究領域が設けられています。また、本博士課程は、院生相互の高度な水準での創造的な交流の場を醸成するために、全体を美術1専攻とし、ひとつの研究棟に学生が集い合う形をとっています。

昨年度の博士号取得者および学位論文のテーマ

- Sigrid Hofmeister（彫刻）
「立体造形の生成プロセスにおける記憶と追想—モニュメントの一形態としての「声」というメディアをめぐる—」
- ビリガバト（視覚情報デザイン）
「モンゴル語デジタルフォントの合字に関する研究—直線型及び非直線型フォントの開発の試み—」
- 李 東郁（産業工芸・意匠）
「韓国における家具工芸の実践的研究—木工芸ギャラリーの経営を通じて—」
- 長谷川 容子（芸術学）
「西大寺十二天画像研究」

音楽専攻

大学院音楽研究科 博士（後期）課程とは

博士（後期）課程は、学部での基礎教育および大学院修士課程等における専門的な技術や学識の研鑽を経た能力の持ち主が、広領域的アプローチを視野に入れながら自己の専門領域の研究を深化させるための課程です。専門研究を担う、作曲／指揮・器楽・声楽・音楽学の4領域が音楽専攻として単一組織にまとめられています。

この課程は、最高水準での音楽研究のための国際交流の場を提供します。そのため、定員内で外国人留学生に対する特別入試を実施し、受入れに対する配慮を行います。また、すでに社会人として演奏活動や研究活動に活躍している専門家にも、先端的な研究成果や情報や生涯の課題である芸術的研鑽の場を提供し、社会人の再教育の場としての役割を担います。そのための門戸開放として、定員内で社会人を受入れる配慮や特別入試の実施によって、音楽学部や音楽研究科修士課程を卒業・修了後、海外に留学し、豊かな経験を積んだ優秀な人材の受入れも歓迎します。

現在も多くの学生が、博士号取得に向けて日々研究に取り組んでいます。

博士号取得者インタビュー

名和 晃平 さん 2002年度 取得
現在 アーティスト



博士（後期）課程に進学しようと思った動機を教えてください。

大学院の頃に自分が将来やりたいことが見えて来て、そのためには時間と空間を使って研究を続けることが必要だと思ったからです。

修士課程との違いはどのようなものですか？

自分の考えていることを明文化し、論じることを求められるところ。それが歴史的、社会的にどのような意義があるのか、なぜ芸術と呼べるのか、根本から問われるところ。

京都市立芸術大学の特徴とは？

活躍している先輩が身近にいて、縦横の関係のなかに「ものづくり」の精神、緊張感があり、それが学風にも繋がっています。「教えられる」「つくられる」ではなく、「自分でつく」人が自然と生まれるような環境です。



卒業後はどのような活動をされていますか？

京都、大阪、東京の他、海外での個展やグループ展など。その他、国際展や企業とのコラボレーションなど、さまざまなプロジェクトを抱えながら、現在は京都の伏見区を拠点に活動しています。

◀「PixCell-Deer#5」2007年制作

博士号取得者インタビュー

高橋 範行 さん 2006年度 取得
現在 新潟大学 勤務



博士（後期）課程に進学しようと思った動機を教えてください。

修士課程で行った演奏技能の発達に関する研究をさらに掘り下げてみたいと思い博士課程進学を決めました。

修士課程との違いはどのようなものですか？

博士（後期）課程では、基本的に学生が自分の力で研究を進めていくとともに、学会発表や論文誌への投稿などを通して研究者としての能力を高めていきます。

学位を取るまでの間どのような研究をされていたのですか？

私はピアノ演奏技能の発達を研究テーマとして、実験によって演奏熟達者の特徴を探り、最終的に博士論文としてまとめました。

京都市立芸術大学の特徴とは？

新研究棟には博士課程専用の研究室があり、充実した研究環境が整っています。また、各専攻の学生・教員が集まり学生の研究内容について議論する総合演習という授業では、別領域からの視点や示唆を得ることができます。

京都市立芸術大学 今後の予定

EVENTS SCHEDULE

美術

FINE ART, DESIGN & CRAFT

2009/1/20 (火) ~ 27 (火) 望月重延教授 退任記念展 (京都市立芸術大学 芸大ギャラリー) <入場無料>

2009/1/20 (火) ~ 27 (火) 小嶋悠司教授 退任記念展 (京都市立芸術大学 芸術資料館) <入場無料>

2009/2/11(水・祝)~15(日) 作品展 (京都市美術館 本館・別館、京都市立芸術大学) <入場無料>

音楽

MUSIC

2009/1/15 (木) 第131回 定期演奏会 (京都市立芸術大学 講堂) <入場無料>

2009/2/16 (月) 文化会館コンサート2 (京都市北文化会館) <入場無料>

2009/2/21 (土) 第24回 大学院オペラ公演 (京都市立芸術大学 講堂) <入場無料>

2009/3/21 (土) 第38回 卒業演奏会 (京都市立芸術大学 講堂) <入場無料>

日本伝統音楽研究センター

RESEACH CENTRE FOR JAPANESE TRADITIONAL MUSIC

2009/1/8 (木) 第7回 伝音セミナー「寄席の音曲を聴くー立花家橘之助を中心に」(京都市立芸術大学 新研究棟) <受講料無料>

2009/1/12 (月・祝) 第3回 公開講座「胡弓の謎を探るーその源流と魅力ー」(京都市立芸術大学 新研究棟) <受講料500円>

2009/2/5 (木) 第8回 伝音セミナー「映画説明レコードとはなにか?」(京都市立芸術大学 新研究棟) <受講料無料>

2009/2/7 (土) 第4回 公開講座「幸若舞に能の源流をみるー中世芸能の伝承と復元<敦盛>」(ウイングス京都イベントホール) <受講料1,000円>

京都市立芸術大学 創立130周年記念 シンボルマーク募集!

INFORMATION

京都市立芸術大学は、明治13年に日本初の公立の絵画専門学校として開設され、平成22年には130周年を迎えます。現在これを記念するシンボルマークを募集しています。このシンボルマークは、平成21年から平成22年にかけて、京都市立芸術大学の130周年記念事業や記念事業に関する印刷物、ホームページ等に使用します。

応募資格

15歳以上の方

応募規定

- 1 キーワードは、「130周年」「伝統と先進」です。
- 2 A4版用紙(白紙、縦横自由)1枚につき1作品とします。
- 3 色数は自由です。ただし、単色で使用する場合がありますので、単色による表現も同じ用紙に記載してください。
- 4 彩色材料は自由です。
プリンターで出力したもので構いません。
- 5 作品には「デザインの趣旨」「住所」「氏名(ふりがな)」「電話番号」を記載した用紙を添付してください。

注意事項

- 1 応募は、一人3点以内とし、自作・未発表のものに限ります。
- 2 他のシンボルマーク及び商標と類似しないものであること。
類似のシンボルマーク・商標があった場合、採用及び受賞を取り消すと同時に、損害賠償を請求することがあります。
- 3 採用作品に関する一切の使用権は、主催者に帰属します。
また、補正を行う場合があります。
- 4 応募作品は返却しません。

応募期間・方法

平成20年12月1日(月)から平成21年1月31日(土)まで。
郵送(必着)もしくは持参。

賞

- ・最優秀賞(採用作品)1点 図書カード5万円分
- ・優秀賞 2点 図書カード2万円分

審査・発表

- 1 主催者が委嘱する審査員により審査を行います。
- 2 受賞者には直接ご連絡するほか、ホームページ等で発表します。
- 3 平成21年2月下旬に発表します。

作品の応募及び問合せ先

〒610-1197
京都市西京区大枝沓掛町13-6 京都市立芸術大学
130周年記念事業実行委員会シンボルマーク係
(京都市立芸術大学企画広報課内)
TEL 075-334-2204
FAX 075-334-2241
Email public@kcua.ac.jp
URL <http://www.kcua.ac.jp>

発行元

京都市立芸術大学全学広報委員会

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6
TEL 075-334-2204

京都市印刷物第204504号